

“新しい風景”を見よう

— 杉並の新人女性候補者が大健闘した 統一地方選挙

岸本 聡子

2023年4月の統一地方選挙は、「自治と民主主義を地域から！」という取組が試される大きな契機となりました。

全国的に見れば、国政へのあきらめから来る政治不信など、憂慮すべき課題も突きつけられたことは事実です。しかしそんな中であっても、「希望の芽」といえる結果がいくつも生まれました。

私自身は、2022年6月の杉並区長選挙にて、住民の皆さんの支援によって僅差の勝利を果たしました。その後、住民たちは「区長は変わった、次は議会だ」をスローガンに、自らが区議選に新人として立候補していくという動きが起きました。そのほぼすべてが、30代～50代の女性たちです。カフェを経営する女性、保育士など多様な面々でした。彼女たちとは、区長選挙の頃から、「政治のあり方自体を変えたいね」と話してきました。つまり、これまでの男性中心社会の中で当たり前とされてきた競争や足の引っ張り合い、利権でつながる政治ではなく、協働・協力・共有をベースにし、「パワー」を民主的に運用していく政治です。

一方、候補者だけでなく、住民たちも多様な取組を通じて選挙を盛り上げてきました。インターネット上の政策比較サイト「杉並区議選ドラフト会議」や、党・会派を超えて新人女性候補を中心に一斉に街頭に立つ「共同街宣」などです。私自身も、4月4日～14日まで、杉並区内の駅頭に立ち、投票率アップを目指す「ひとり街宣」を行いました。

こうした取組の結果、投票率は前回区議選より4.19ポイント(約2万人)上がり43.66%となりました。定数48議席のうち、新人は15人(31%)、現職12人が落選、女性は24人で男女半数が実現できました。これによって、議会の風景が大きく変わり、より地域社会や生活に近い多様性を反映されることが期待できます。地域の政治はまさに「民主主義の学校」です。ジェンダー平等や多様性を当たり前への価値にし、実践していきたいと思います。



PROFILE

きしもとさとこ：東京都杉並区長。日本大学文理学部卒業後、国際青年環境 NGO 「A SEED JAPAN」スタッフ、国際政策シンクタンク NGO 「トランスナショナル研究所 (TNI)」研究員を経て、2022年6月杉並区長選当選。杉並区で女性初の区長に就任。主な著作に『水道、再び公営化！－欧州・水の闘いから日本が学ぶこと』（集英社新書、2020）、『地域主権という希望－欧州から杉並へ、恐れぬ自治体の挑戦』（大月書店、2023）。